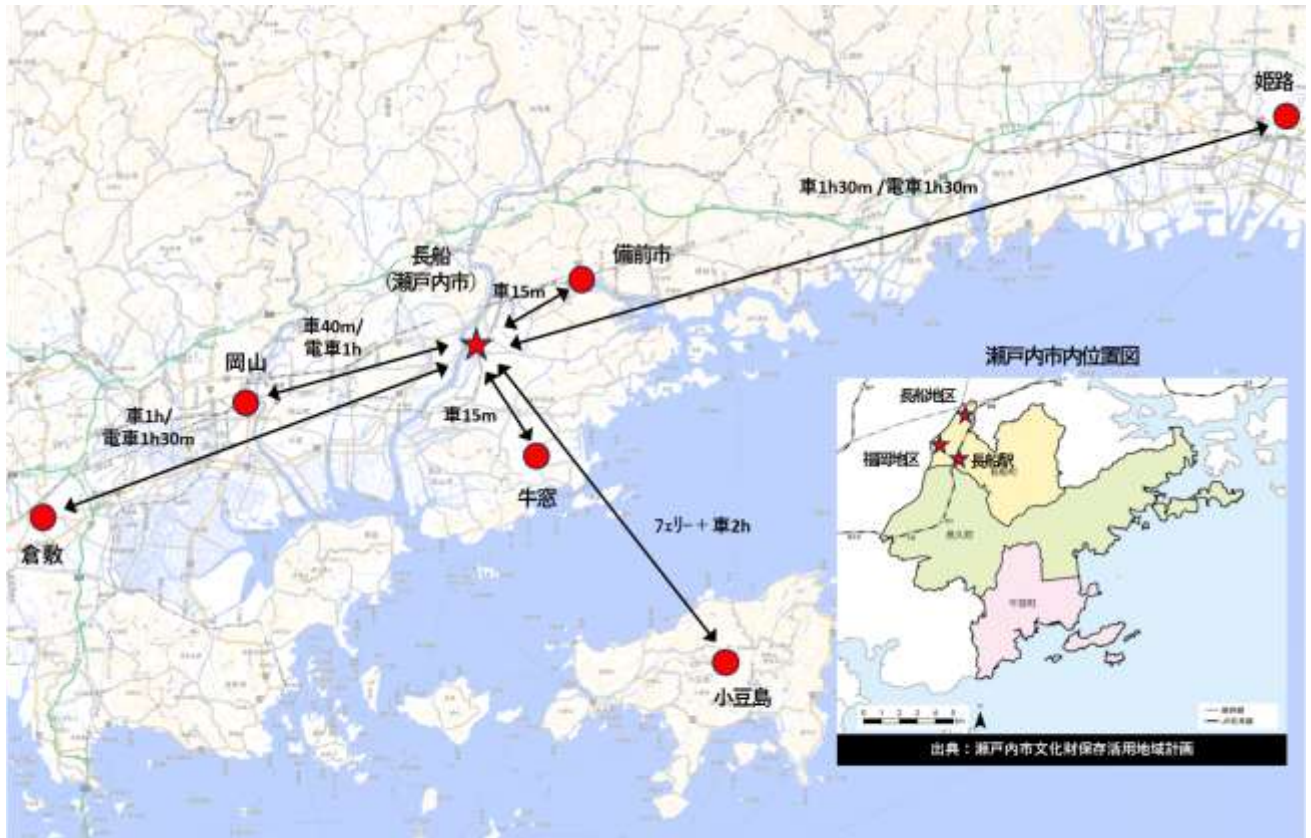


福岡地区の現状と課題

1 周辺地域の概要と現状

①瀬戸内市福岡地区の概要

瀬戸内市は岡山県南東部に位置し、西は岡山市、北東には備前市と接している。市の西端を南北に一級河川吉井川が流れ、中央部には千町川との間に千町平野が広がり、東南部は瀬戸内海に面した丘陵地と、長島、前島などの島々からなる。



備前長船は平安時代から刀剣の産地として知られ、福岡一文字派や長船派などの流派が生まれ、多くの名工を輩出した。贈答用として愛用された名工らによる銘刀のほか、数打ち物といわれる大量生産品の刀剣も数多く生産されている。現在、国宝や重要文化財に指定されている刀剣の約4割が備前刀で占めており、質と量ともに「日本刀の聖地」と呼ばれるにふさわしい備前長船には、刀剣にまつわる歴史とともに、刀剣制作の技術を受け継ぎながら取り組む職人たちや愛好家が集う土地となっている。

福岡地区は、南北に流れる河川である吉井川と東西を貫く山陽道が交わる結節点に位置し、鎌倉時代に隆盛を極め、多くの名工・名刀を生み出した福岡一文字派が生まれた地であり、現在も岡山藩池田家が江戸期に整備した歴史的な町並みが残る。中世には西日本随一の商都であり、人々や物、情報が行き交う交通の要所として栄えた。国宝『一遍上人絵伝』には、当時の繁栄ぶりがうかがえる様子が描かれている。

② 文化観光事業の現状

瀬戸内市では令和3年に文化観光推進法にもとづき「備前長船刀剣博物館「日本刀の聖地」拠点計画」が認定され、備前長船刀剣博物館を核に「日本刀の聖地」をコンセプトに据えた文化観光推進事業に取り組んできた。

これまでに、博物館の展示リニューアルや多言語支援員の雇用によるインバウンド対応のほか、VR・AR といったデジタル技術の活用、案内板・誘導板の設置による周遊促進、コンセプトを軸にした情報発信体制の強化などを段階的に推進している。

あわせて、海外向け SNS による情報発信や、インバウンド対応旅行事業者プロモーションなどを実施し、刀剣文化の海外発信と誘客促進に取り組んでいる。これらの取組により、令和 7 年度の外国人来館者数は過去最高を更新した(令和 8 年 1 月末時点:3,053 人、過去最高であった令和元年度:2,379 人)となった。また、県内でインバウンド富裕層が宿泊する施設からの来館も見られ、刀剣文化を体験できる拠点として認知が着実に高まっている。

こうした取り組みは、令和 5 年度の認定事業者会議および令和 6 年度のオンライン説明会において拠点計画の先進事例として紹介・登壇するなど、他地域からも注目される実践となり、同事業への申請を目指す地域からの視察の対象となっている。

さらに、拠点施設の整備と同時に、福岡一文字派の誕生地である福岡地区などの周辺地域への周遊を促すため、行政、観光協会を中心に看板の整備、ガイド育成などに取り組んできた。



備前長船刀剣博物館

備前長船刀剣博物館は備前刀を中心に日本刀の展示解説する博物館であり、歴史、文化、技術についての知識を深めることができる。また、隣接する工房では日本刀制作の過程や職人たちの作業風景を見ることができ、刀鍛冶や塗師、白銀師、装剣金工師、鞘師、研師などが手がける技を間近で体感できる日本唯一の施設である。刀鍛冶になるための国家的な登竜門である文化庁主催「美術刀剣刀匠技術保存研修会(国家試験)」が、近年では当館併設の工房で実施されている事実からも明らかのように、備前長船は現代においてもなお、日本刀の技と精神が息づく「日本刀の聖地」である。

令和 6 年 6 月、瀬戸内市はフランス・パリの LVMH(ルイ・ヴィトン グループ)本社を訪問し、同社の最高戦略責任者であるジャン・バチスト・ヴォワザン氏に対し、備前長船刀剣博物館の名誉館長就任を正式に要請、同氏の就任が実現した。これにより今後、ヴォワザン氏のネットワークや専門知見を活かし、日本刀および備前焼の海外展開に向けた戦略的支援が本格化する見込みである。

また、令和 7 年度以降には、パリ市内の LVMH 関連ショールームにおいて、備前刀および備前焼の展示・販売会が開催される見通しであり、本地域の伝統産業が国際市場において新たな文化的・経済的価値を創出する機会として飛躍する基盤が整ってきた。



長船真剣勝負

2 刀剣文化発信の課題

①刀剣文化の本質的価値を伝え、地域の日常に根ざした文化体験として再構築する仕組みづくり

刀剣文化の本質的価値を伝え、地域の日常に根ざした文化体験として再構築する仕組みづくり

長船地域には、刀匠をはじめ、研師、鞘師、柄巻師、金工師、さらには居合道家といった実践者も活動しており、日本刀にまつわる高度な技術と精神性が今なお受け継がれている。こうした人材と技術が集積し、刀剣文化の全体像を地域内で体感できる環境は全国的にも希少であり、長船はまさに「日本刀の聖地」としての認知が広がってきている。

他方で、これまでの文化観光施策により、名刀の展示や関連イベントなどを通じて一定の成果は見られるものの、職人や実践者の持つ価値を十分に可視化・体験化し、刀剣文化を来訪者が「本物の文化体験」として自らの内面に重ね取り込み、ジブンゴト化するまでの重なりしろは未だ十分に構築されておらず、真の意味での文化定着には至っていないのが現状である。来訪者にとっては一時的な体験にとどまり、地域住民にとっても刀剣文化は身近な存在とはなっておらず、自らの暮らしや営みと結びついた文化として実感されていない。その結果、文化体験は特定の名刀展示など限られたコンテンツに集客が依存する構造となり、年間を通じた安定的な誘客や地域全体での文化循環にはつながっていない。

これまで実施されてきた事業も、名刀の展示や催事を通じて個々には一定の成果を挙げてきたが、それぞれの取組がまだ点として存在しており、暮らしの中に文化が根づくような持続的な仕組みとして面に広がるには至っていないのが現状である。現在は、点と点を結び、文化の線や面へと展開していく過渡期にあると言える。

②本物の刀剣文化を軸とした滞在・消費を促す拠点整備と文化経済循環

長船地域は、平安時代から続く日本刀の一大生産地として知られ、刀匠の鍛刀技術や関連職人の技、刀剣信仰にまつわる社寺や史跡が今なお息づいており、「日本刀の聖地」としての歴史と現在が地続きに存在する全国でも稀有な地域である。刀剣専門の博物館と工房・売店も整備され、文化観光拠点として一定の機能を果たしてきたが、来訪者が刀剣文化の本質に深く触れ、長時間滞在しながら地域と関わるための「体験・交流・宿泊」の拠点が存在せず、その不在が地域消費の拡大と文化経済の持続性における大きな制約となっている。

特に、福岡一文字派の発祥地であり、江戸期の町並みが良好に残る福岡地区は、滞在型観光への展開が強く期待されるにもかかわらず、宿泊施設は皆無、飲食施設も1軒のみという現状にある。こうした受け入れ環境の脆弱さゆえに、博物館を訪れる来訪者も短時間で地域を離れてしまい、地域内での回遊や消費が限定的な

的なものにとどまっている。

さらに、来訪者の多くが国宝「太刀 無銘一文字(山鳥毛)」の展示期間や大型連休といった限られた時期に集中しており、年間を通じた誘客の平準化や、再訪・継続的関与を生む仕組みには至っていない。これにより、文化観光が持つ本来的なカー地域の文化資源を磨き、発信し、人との関係性を耕していくカーが活かしきれていないのが現状である。

加えて、地域としての多言語対応も十分に進んでおらず、博物館来館者の増加に比して、周辺地域を訪れる外国人は依然として少ない状況にあり、外国人観光客による地域全体への経済波及もなお限定的な段階にとどまっている。

③文化観光まちづくりを担う多様な人材の発展・育成・協働の仕組みづくり

長船地域では、行政主導による文化観光を軸としたまちづくりがこれまでに一定の成果を上げてきたものの、それを面的に拡張し、民間も交えた持続的な取組へと発展させていくためには、地域全体を横断的にコーディネートする人材や、滞在施設の運営、観光体験の提供を担う人材・事業者のスキルやノウハウが不足しており、体制整備と人材育成が依然として課題となっている。

また、地域には刀剣文化に魅力を感じ、自ら関わりたいと願う愛刀家や歴史ファン、さらにはゲームやアニメを契機に関心を持った新たな層も存在しているが、そうした担い手候補は可視化されておらず、個々のつながりにとどまっているのが現状である。

文化観光を持続的に展開していくためには、地域住民の参画に加え、地域外からの多様で主体的な人材との協働体制を構築し、地域の価値や資源を共に掘り起こし、磨き上げ、発信していく仕組みづくりが不可欠である。

3 課題に対する実施方針

2 の課題に対し、歴史・文化・技術の中核である刀剣文化を軸に、福岡地区の歴史的な町並みや点在する古民家群を面的に活用する取組を推進している。第 1 号として、地域の民間事業者において、「棟梁の家 東原邸」を宿泊施設に改修し、令和 8 年 6 月に営業を開始した。また、拠点整備とあわせて、福岡地区のにぎわい創出のための事業を実施しているところである。



福岡地区の町並み